

労働政策研究報告書 No.125

サマリー

2010

JILPT : The Japan Institute for Labour Policy and Training

学校時代のキャリア教育と若者の職業生活

執筆担当者（執筆順）

氏名	所属	執筆担当章
西村 公子	労働政策研究・研修機構 統括研究員	第1章1(1)(2)、 第1章2、第8章
下村 英雄	労働政策研究・研修機構 副主任研究員	第1章1(3)、 第1章3～4、 第2章～第6章、 補章1
高久 聡司	労働政策研究・研修機構 臨時研究協力員	第7章
川崎 友嗣	労働政策研究・研修機構 特別研究員	補章2

概要

本研究では23～27歳の若者約4,000名を対象に調査を行い、学校時代のキャリア教育に対する評価、学校時代に行った職業や進路に関する授業や行事に関する記憶などをたずね、それら評価および記憶と学校卒業後のキャリア、現在の就労意識等との関連を検討した。あわせて自由記述データによる分析や地方の教育・労働指標との関連についても分析を行った。これらの調査結果を受けて、労働行政におけるキャリア教育の推進に向けて、これからのキャリア教育と労働行政の関わりについて示唆を行った。

1. 本研究の目的

キャリア教育が本格的に実施される時代を迎えて、その効果と評価の測定が非常に重要な問題となる。キャリア教育の有効性や効果に関する視点は様々あるが、特に、キャリア教育が将来のキャリア形成に向けた準備段階で実施されるものである以上、学校段階でのキャリア教育がその後のキャリア形成や職業生活にどのような影響を与えるかという中・長期的な視点からの検討が必要である。しかしながら、日本においてはそのような視点からの研究はほとんどみられない。労働行政においては、キャリア教育がその後の労働市場や労働力需給に影響を与える可能性に関心を有し、かつそれを重要視している。そのため、キャリア教育の短期的な効果ではなく、労働市場参入後における職業生活からみた中・長期的な効果に関心をもつこととなる。

ただし、キャリア教育とその後の職業生活との関連を分析・検討するに当たって、学校卒業後の追跡調査による方法を採用し大規模なデータを収集することは、費用、期間の面から困難である。また、職業生活については、キャリア教育に加えて、その他の経験の影響が様々あり、キャリア教育の効果を抽出することは困難を伴う。

そこで本研究では、現在職業に就いている者等が、キャリア教育の各事項を「覚えているか、覚えていないか」という事実を確認し、現在の職業生活にその内容が「役だったか、役立っていないか」という評価を求め、これらと様々な条件との関連をみることにより、中・長期的なキャリア教育の有効性を検討することとした。このような手法を用いることにより、学校時代のキャリア教育と若者の職業生活が具体的にどのような側面でどのように関連がみられるのかを様々な角度から提示し、中・長期的なキャリア教育の有効性等を検討するものである。

2. 調査研究の方法、収集データ概要

(1)調査対象者

25歳前後（23～27歳）の若年者。調査対象者を25歳前後とした理由は、①キャリア教育が広がりはじめた1990年代後半に中学校生活を送った年代が現在20代中盤になっていること、②大卒後3年であり学校から社会への移行・定着の評価を行うにあたって一定の区切りと考えられることの2点であった。また、国内における地域差を検討する目的から、各都道府県から最低30名以上の回答者数を確保することとした。その他、性別・学歴・職業等に極端な偏りが出ないように配慮することとした。

(2)調査項目

- ・回答者の基本属性（性別、居住地（現在・過去）、年齢）
- ・学校卒業後のキャリアについて（就職活動の成否、卒業後の進路、離転職状況）
- ・現在の職業について（労働時間、賃金、勤務先の業種・職種）

- ・学校時代のキャリア教育・キャリアガイダンス（学校時代のキャリア教育の印象・記憶）
- ・現在の職業生活に役立ったと思う学校時代の経験（自由記述）
- ・職場体験学習、高校進路指導、進路相談・キャリアカウンセリングについて
- ・現在の生活意識・職業意識（満足感、自尊感情、悩み）他

(3)調査手法

調査は2010年2～3月に実施した。調査会社を通じて、調査会社のモニターに郵送にて調査票を配布し、返送するように依頼した。最終的に23～27歳5,576名（男性1,932名、女性3,643名、不明1名）を回収した。

ただし、各都道府県から最低30名以上の回答者を確保することを優先したために、最終的に回収された調査回答者の性別構成比は女性が約65%と女性割合がかなり高くなった。そこで、女性の回答者からさらにランダムに再サンプリングを行って2,000票を抽出し、最終的に男性・女性の比率をおおむね1：1にあわせ、計3,932名のデータでその後の分析を行った。なお、この再サンプリングは3回行い、再サンプリングしたデータセットを3つ作成し、主だった質問項目で回答傾向を比較した。その結果、全ての項目で統計的に有意な差はみられなかった。また、データセットによって若干回答傾向に差が視認できる場合も最大で数%以内の範囲に収まっていた。以上のことから、本研究では最初に再サンプリングしたデータを本報告書で分析するデータセットとして用いることとした。

(4)収集データ概要

上記の再サンプリングの結果、年齢と性別の内訳は若干のばらつきはあるものの、各年齢ともにおおむね男女50%ずつの割合となった（図表1参照）。また、学歴は全体的に平成19年就業構造基本調査の25～29歳の学歴構成比と比べて「大学・大学院」卒業者が多く「高校」卒業者が少ない。本報告の調査結果はこの点に留意して解釈する必要がある。なお、年齢による学歴の歪みはなかった。また、年齢別にみた現在の仕事上の立場の内訳を検討した結果も、平成20年労働力調査の同年代の数値と照らして極端な歪みはみられなかった。

図表1 本調査回答者の性別と年齢の内訳

	23歳	24歳	25歳	26歳	27歳	合計
男性	179	241	393	506	608	1927
	52.2%	45.2%	52.8%	48.9%	48.1%	49.2%
女性	164	292	351	528	656	1991
	47.8%	54.8%	47.2%	51.1%	51.9%	50.8%
合計	343	533	744	1034	1264	3918
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

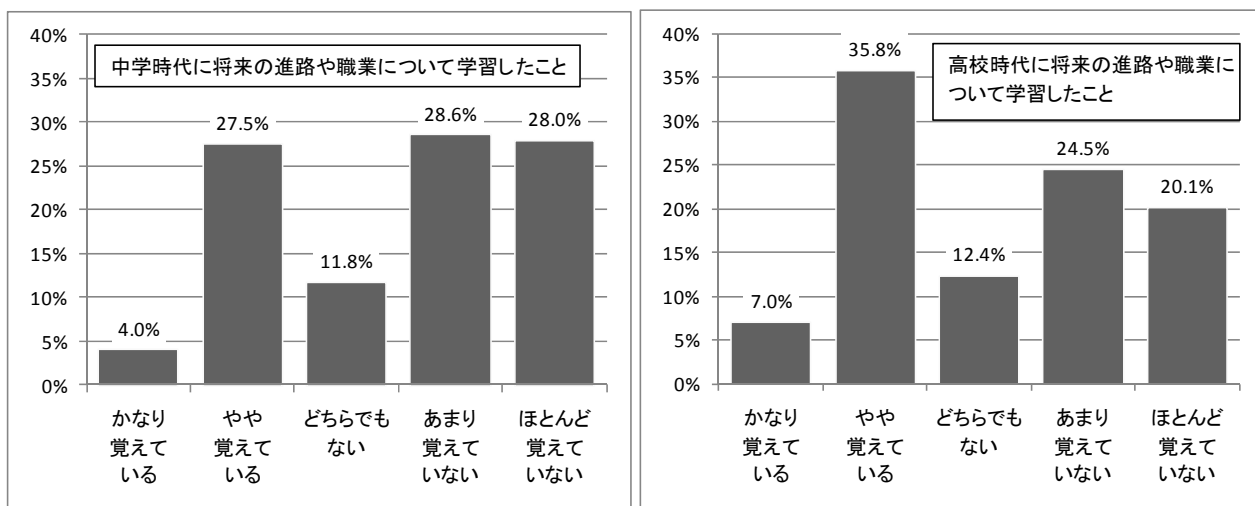
※表に記載した以外に年齢不詳の14名あり。

3. 研究の結果—各章の主な内容

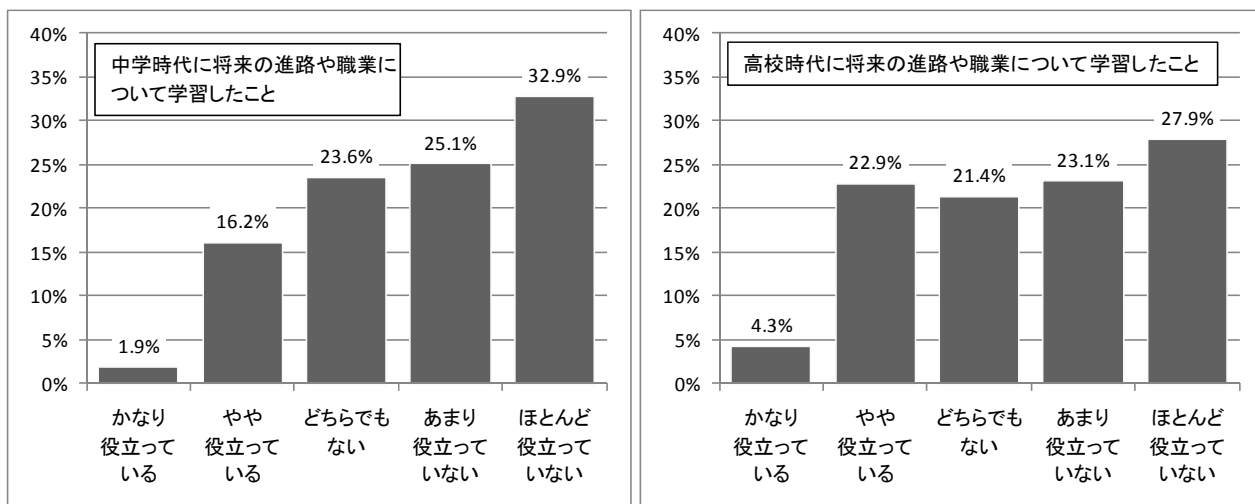
(1)「第2章 学校時代のキャリア教育に対する評価」の主な内容

第2章では、中学時代・高校時代のキャリア教育に対する全般的な印象・評価を検討した。学校時代のキャリア教育を「覚えている」割合は、中学校では「かなり覚えている」「やや覚えている」を合計して約30%程度であった。高校では同じく約40%程度であった（図表2参照）。性別・年齢・地方による違いを検討した結果、年齢で違いがみられ、年齢が若いほどキャリア教育をよく覚えていた。

一方、「役立っている」割合については、中学・高校ともに「ほとんど役立っていない」という回答が最も多く、それぞれ30%前後に達していた。「役立っている」割合は、中学では約20%、高校では約25%であった。



図表2 「中学時代・高校時代に進路や職業について学習したこと」を覚えている割合



図表3 「中学時代・高校時代に進路や職業について学習したこと」が役立った割合

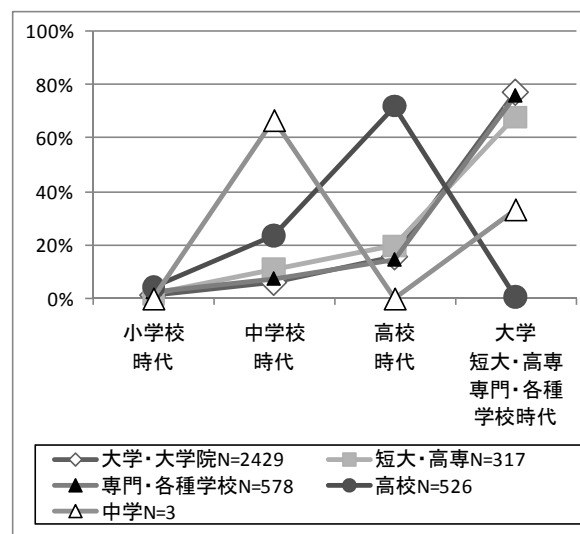
学校時代に行ったキャリア教育関連の授業や行事については、中学・高校では二者面談・三者面談が記憶に残っているという共通性がみられた。ただし、中学ではボランティアなどの体験活動や職業人に話を聞く授業なども多く記憶されている一方、高校では個別相談・カウンセリングや興味検査・適性検査などが記憶されている割合が高かった。また、大学では興味検査・適性検査が記憶に残っている者が多かった点で高校と共通しているが、より具体的な就職活動の進め方や履歴書の書き方、面接試験・試験対策に関する授業が記憶に残っている割合が高かった（図表4参照）。

図表4 中学・高校・大学等に行った授業や行事で記憶にあるものの割合

	中学	高校	大学等	中学で重視	高校で重視	大学で重視	その他
職業興味や職業適性などの検査	19.3%	33.5%	44.0%			○	
自分の性格を理解するための検査	21.7%	32.7%	42.4%			○	
職業や仕事を調べる授業	31.1%	21.8%	21.5%	○			
職業人や地域の人に仕事の話聞く授業	31.5%	15.1%	18.4%				○
職場体験学習やインターンシップ	26.3%	11.7%	30.6%				○
ボランティアなどの体験活動	31.9%	20.2%	15.5%	○			
進路に関する二者面談や三者面談	68.1%	80.2%	17.7%		○		
進路に関する個別相談やカウンセリング	22.3%	41.6%	29.1%		○		
進路の目標や計画を考える授業	18.9%	31.9%	18.6%		○		
履歴書の書き方や面接試験の練習	11.3%	25.5%	47.9%			○	
就職活動の進め方や試験対策の授業	4.5%	16.5%	48.5%			○	
コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	5.8%	14.8%	32.5%			○	
労働法(働くことに関する法律)に関する授業	3.5%	7.7%	21.4%			○	

※数値は記憶にあると答えた回答者の割合。各学校段階で上位3位のものに網かけを付した。
また「中学・高校・大学で重視」の欄は%の値から判断して傾向を示した。

基本的に、回答者は最終学歴に最も近い学校種に通っている時に、将来の進路や職業について最も学習したと思う傾向が強かった。そのため、例えば、高校卒業で就職した回答者は、高校時代に行った授業や行事を役立ったと考える傾向がみられた（図表5参照）。



図表5 最終学歴別にみた将来の進路や職業について最も学習したと思う時期

(2)「第3章 学校時代のキャリア教育と学校卒業後のキャリアとの関連」の主な内容

第3章では、学校時代のキャリア教育と学校卒業後のキャリアとの関連を検討した。本章の結果は、以下の2点に集約される。①「大卒」「卒業直後に正規就労」「非正規就労経験なし」「転職経験なし」といった、いわば「直線的」なキャリアを歩んだ回答者は、中学・高校時代のキャリア教育は評価が高い。一方で、「直線的」なキャリアを歩んだ回答者は高等教育機関まで進む者が多いので、実際には自分が最後に通った大学、短大・高専、専門・各種学校時代に進路や職業について最も学習したと考えている。②何らかの形で「直線的」なキャリアを歩んでこなかった回答者は、総じて学校のキャリア教育を高く評価しないので中学・高校のキャリア教育の評価も低い。一方で「直線的」なキャリアを歩まなかった回答者は高等教育機関まで進む者が多くないので、実際には自分が最後に通った高校（または中学）時代に進路や職業について最も学習したと考えている（図表6～図表8参照）。

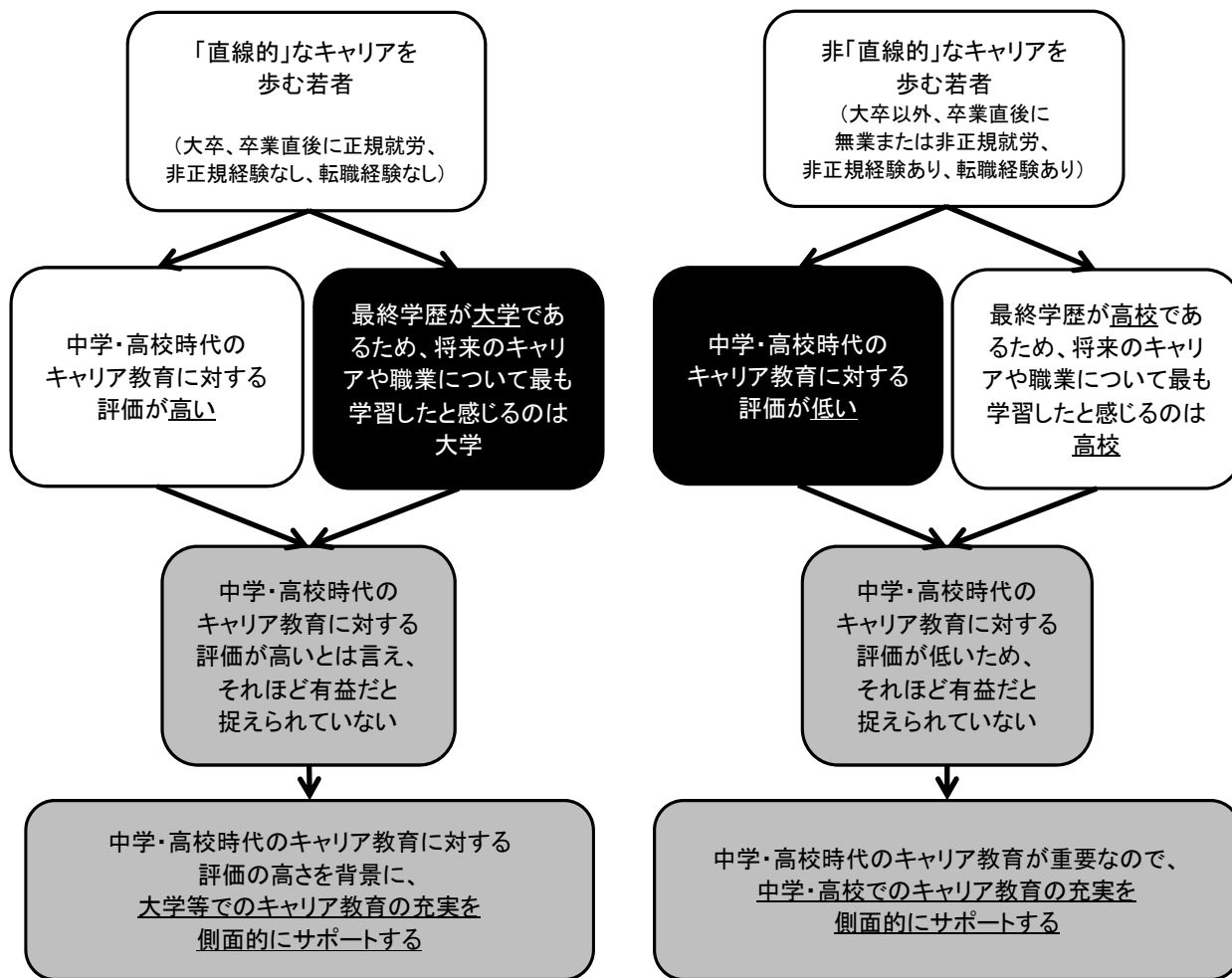
「直線的」なキャリアを歩む可能性がある者にとっては大学等が、また「直線的」ではないキャリアを歩む可能性のある者にとっては、中学および高校が、将来の進路や職業について最も学習する場であるため、それぞれの対象層に応じた適切なキャリア教育を側面的にサポートする必要があることを示唆した。

図表6 学校卒業後のキャリア別にみた中学時代のキャリア教育の評価

覚えている					役立っている				
学歴	学校卒業直後の働き方	非正規就労経験	転職経験	覚えている割合	学歴	学校卒業直後の働き方	非正規就労経験	転職経験	役立っている割合
大卒	正規	なし	あり	36.2%	大卒	非正規	3年以内	あり	22.9%
大卒	正規	なし	なし	35.5%	大卒	正規	3年以内	なし	21.6%
大卒	非正規	3年以内	あり	33.9%	大卒以外	正規	なし	あり	21.6%
大卒	正規	3年以内	なし	32.4%	大卒	正規	なし	あり	21.6%
大卒	非正規	3年以内	なし	31.8%	大卒	正規	なし	なし	20.2%
合計				31.6%	大卒	非正規	3年以上	なし	20.0%
大卒	非正規	3年以上	なし	30.8%	大卒	無業	なし	なし	18.4%
大卒	正規	3年以内	あり	30.7%	合計				18.2%
大卒以外	非正規	3年以内	なし	30.6%	大卒以外	正規	3年以上	あり	16.9%
大卒以外	非正規	3年以内	あり	29.5%	大卒以外	非正規	3年以内	あり	16.5%
大卒以外	正規	なし	あり	27.4%	大卒以外	無業	3年以内	なし	12.9%
大卒以外	非正規	3年以上	なし	26.7%	大卒以外	非正規	3年以上	なし	12.8%
大卒	無業	なし	なし	26.3%	大卒	非正規	3年以内	なし	12.5%
大卒	非正規	3年以上	あり	23.2%	大卒	非正規	3年以上	あり	12.2%
大卒以外	正規	3年以上	あり	22.5%	大卒以外	非正規	3年以上	あり	11.8%
大卒以外	非正規	3年以上	あり	22.1%	大卒以外	非正規	3年以内	なし	11.3%
大卒	無業	3年以内	なし	18.5%	大卒	正規	3年以内	あり	10.7%
大卒以外	無業	3年以内	なし	12.9%	大卒	無業	3年以内	なし	9.3%

図表7 学校卒業後のキャリア別に見た高校時代のキャリア教育の評価

覚えている					役立っている				
学歴	学校卒業直後の働き方	非正規就労経験	転職経験	覚えている割合	学歴	学校卒業直後の働き方	非正規就労経験	転職経験	役立っている割合
大卒	正規	なし	なし	48.3%	大卒以外	正規	なし	あり	33.5%
大卒	非正規	3年以内	あり	47.5%	大卒以外	正規	3年以上	あり	32.4%
大卒以外	正規	なし	あり	46.1%	大卒	非正規	3年以内	あり	30.5%
大卒	正規	3年以内	なし	43.2%	大卒	正規	なし	なし	30.3%
合計				43.0%	合計				26.6%
大卒	正規	なし	あり	42.8%	大卒	正規	なし	あり	26.1%
大卒	非正規	3年以内	なし	42.0%	大卒以外	非正規	3年以内	あり	25.2%
大卒	非正規	3年以上	なし	41.5%	大卒	非正規	3年以上	なし	24.6%
大卒以外	正規	3年以上	あり	40.8%	大卒	非正規	3年以内	なし	24.4%
大卒以外	非正規	3年以内	あり	40.3%	大卒	正規	3年以内	なし	24.3%
大卒以外	非正規	3年以上	なし	38.4%	大卒以外	非正規	3年以上	なし	22.1%
大卒	無業	なし	なし	36.8%	大卒	非正規	3年以上	あり	19.5%
大卒	正規	3年以内	あり	36.0%	大卒以外	非正規	3年以内	なし	17.7%
大卒	非正規	3年以上	あり	34.1%	大卒以外	非正規	3年以上	あり	17.6%
大卒以外	非正規	3年以内	なし	32.3%	大卒以外	無業	3年以内	なし	16.1%
大卒	無業	3年以内	なし	31.5%	大卒	無業	なし	なし	15.8%
大卒以外	非正規	3年以上	あり	27.9%	大卒	正規	3年以内	あり	12.7%
大卒以外	無業	3年以内	なし	19.4%	大卒	無業	3年以内	なし	11.1%



図表8 学校卒業後のキャリアによる学校時代のキャリア教育に対する評価の違い(模式図)

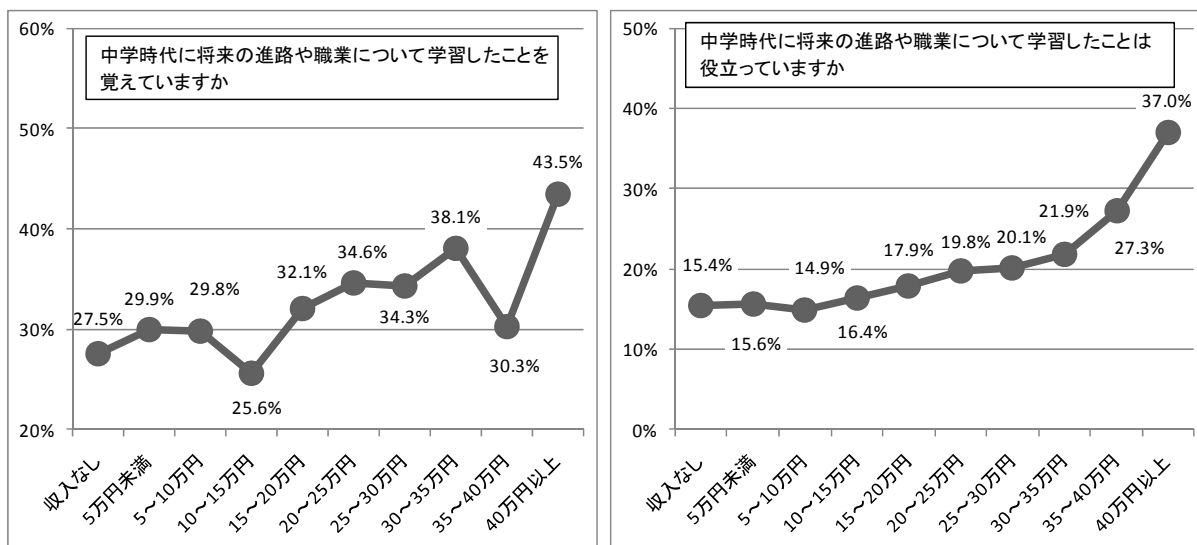
(3)「第4章 学校時代のキャリア教育と現在の就労状況との関連」の主な内容

第4章では、学校時代のキャリア教育と現在の就労状況および就労意識との関連を検討した。その結果、概して言えば、比較的高い収入があり、運輸業、郵便業、教育・学習支援業、医療、福祉などの業種に勤務し、専門的・技術的・管理的職業に就いている者、非正社員経験のない者で、学校時代のキャリア教育に対する評価が高かった。逆に、現在、無業または求職中であるか、パート・アルバイトとして働いている場合、学校卒業直後の就労形態が無業で非正社員経験しかない場合、現在の職業が生産工程・建設である場合に、概して言えば学校時代のキャリア教育の評価が低かった（図表9～図表13参照）。

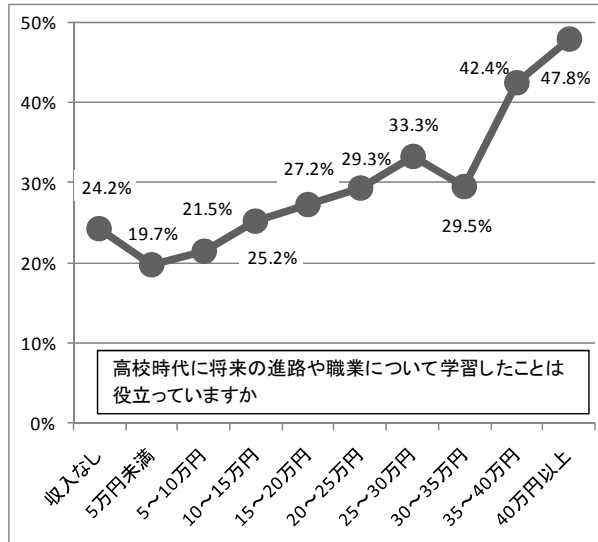
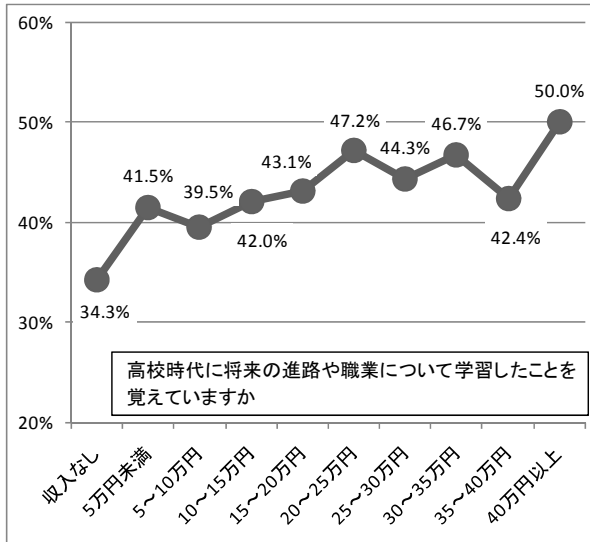
図表9 現在の仕事上の立場別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

		正規 就労 N=238	非正規 就労 N=827	主婦 N=430	無業 その他 N=268
中学	ボラティアなどの体験活動	33.8%	30.1%	30.7%	22.0%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	9.7%	12.7%	13.7%	16.0%
高校	職場体験学習やインターンシップ	10.4%	13.7%	16.0%	10.4%
	進路に関する二者面談や三者面談	81.4%	79.8%	80.2%	71.6%
	進路に関する個別相談やカウンセリング	41.3%	43.7%	44.0%	32.1%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	22.7%	28.3%	36.5%	24.3%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	15.2%	17.9%	22.6%	13.8%
	コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	13.8%	16.3%	19.5%	11.6%
	労働法(働くことに関する法律)に関する授業	6.7%	8.6%	11.2%	8.6%
大学	職業興味や職業適性などの検査	48.2%	39.4%	35.3%	32.1%
	自分の性格を理解するための検査	47.4%	35.9%	31.4%	32.8%
	職業や仕事を調べる授業	23.6%	19.3%	18.4%	14.6%
	職場体験学習やインターンシップ	34.1%	25.0%	26.3%	21.3%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	51.6%	45.2%	37.9%	37.7%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	53.0%	44.5%	38.1%	37.3%
	労働法(働くことに関する法律)に関する授業	23.7%	19.0%	14.9%	19.4%

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。



図表10 1ヶ月の平均収入別にみた中学時代のキャリア教育の評価



図表11 1ヶ月の平均収入別に見た高校時代のキャリア教育の評価

図表12 学校時代のキャリア教育の評価が高い属性(上位15属性)

中学時代のキャリア教育を「覚えている」上位15属性		中学時代のキャリア教育が「役立っている」上位15属性	
現在の収入「40万円以上」	43.5%	現在の収入「40万円以上」	37.0%
勤務先の業種「運輸業、郵便業」	38.4%	現在の収入「35~40万円」	27.3%
現在の収入「30~35万円」	38.1%	現在の職業「専門・技術・管理」	23.0%
勤務先の業種「教育、学習支援業」	37.2%	勤務先の業種「学術研究、専門・技術サービス業」	22.5%
勤務先の業種「金融業、保険業」	35.9%	勤務先の業種「運輸業、郵便業」	22.2%
現在の職業「専門・技術・管理」	35.8%	勤務先の業種「公務」	22.2%
現在の仕事上の立場「自営業・自由業」	34.8%	現在の収入「30~35万円」	21.9%
正社員・非正社員ともに経験なし	34.7%	勤務先の業種「教育、学習支援業」	21.4%
現在の収入「20~25万円」	34.6%	勤務先の業種「製造業」	21.4%
現在の収入「25~30万円」	34.3%	勤務先の業種「医療、福祉」	21.2%
勤務先の業種「医療、福祉」	34.3%	正社員経験3年以上	20.6%
非正社員経験0年	34.1%	非正社員経験0年	20.4%
正社員経験3年未満	34.0%	転職経験あり1回	20.2%
最終学歴「大学・大学院」	33.9%	現在の収入「25~30万円」	20.1%
現在の仕事上の立場「正社員・正職員」	33.9%	週平均労働時間「40~50時間」	20.0%
高校時代のキャリア教育を「覚えている」上位15属性		高校時代のキャリア教育が「役立っている」上位15属性	
勤務先の業種「運輸業、郵便業」	51.5%	現在の収入「40万円以上」	47.8%
勤務先の業種「教育、学習支援業」	51.2%	現在の収入「35~40万円」	42.4%
現在の収入「40万円以上」	50.0%	勤務先の業種「医療、福祉」	38.6%
現在の職業「専門・技術・管理」	49.6%	現在の職業「専門・技術・管理」	37.6%
勤務先の業種「医療、福祉」	49.0%	勤務先の業種「教育、学習支援業」	35.3%
勤務先の業種「製造業」	48.4%	現在の収入「25~30万円」	33.3%
現在の収入「20~25万円」	47.2%	正社員経験3年以上	32.8%
現在の収入「30~35万円」	46.7%	勤務先の業種「公務」	32.8%
現在の仕事上の立場「正社員・正職員」	46.5%	勤務先の業種「運輸業、郵便業」	32.3%
非正社員経験0年	46.4%	勤務先の業種「製造業」	31.5%
週平均労働時間「50時間以上」	46.1%	勤務先の業種「学術研究、専門・技術サービス業」	31.4%
卒業直後の就労形態「正社員・正職員」	45.5%	最終学歴「高校」	31.2%
正社員経験3年未満	45.3%	勤務先の業種「電気・ガス・熱供給・水道業」	30.8%
転職経験なし	45.1%	非正社員経験0年	30.6%
最終学歴「大学・大学院」	45.0%	現在の仕事上の立場「正社員・正職員」	30.5%

※どの設問についても上位15位までに入る属性に網かけを付した。

図表13 学校時代のキャリア教育の評価が低い属性

中学時代のキャリア教育を「覚えている」下位15属性		中学時代のキャリア教育が「役立っている」下位15属性	
現在の仕事上の立場「無職で何もしていない」	15.5%	現在の仕事上の立場「無職で何もしていない」	2.6%
卒業直後の就労形態「無業」	21.8%	現在の仕事上の立場「無職で仕事を探している」	8.2%
勤務先の業種「宿泊業、飲食サービス業」	23.7%	転職経験あり4回	10.3%
現在の仕事上の立場「派遣社員」	24.4%	卒業直後の就労形態「無業」	11.6%
勤務先の業種「わからない」	24.8%	現在の仕事上の立場「家族従業員」	12.0%
転職経験あり3回	25.1%	転職経験あり3回	12.6%
最終学歴「高校」	25.2%	現在の仕事上の立場「パート・アルバイト」	12.6%
非正社員3年以上	25.2%	非正社員経験のみあり	13.2%
現在の収入「10～15万円」	25.6%	正社員経験0年	13.3%
現在の仕事上の立場「無職で仕事を探している」	26.1%	非正社員3年以上	13.3%
現在の仕事上の立場「パート・アルバイト」	26.5%	正社員・非正社員ともに経験なし	13.3%
現在の職業「生産工程・建設」	27.1%	現在の職業「生産工程・建設」	13.9%
非正社員経験のみあり	27.3%	勤務先の業種「生活関連サービス業、娯楽業」	14.5%
現在の収入「なし」	27.5%	卒業直後の就労形態「非正社員・非正職員」	14.7%
転職経験あり4回	27.7%	非正社員経験3年未満	14.7%
高校時代のキャリア教育を「覚えている」下位15属性		高校時代のキャリア教育が「役立っている」下位15属性	
現在の仕事上の立場「無職で何もしていない」	18.4%	現在の仕事上の立場「無職で何もしていない」	5.3%
現在の仕事上の立場「無職で仕事を探している」	29.1%	現在の仕事上の立場「無職で仕事を探している」	11.9%
卒業直後の就労形態「無業」	31.5%	卒業直後の就労形態「無業」	13.9%
現在の職業「生産工程・建設」	32.5%	現在の仕事上の立場「家族従業員」	16.0%
勤務先の業種「わからない」	33.3%	正社員・非正社員ともに経験なし	17.3%
現在の収入「なし」	34.3%	勤務先の業種「生活関連サービス業、娯楽業」	18.2%
現在の仕事上の立場「派遣社員」	34.8%	現在の職業「サービス」	18.3%
現在の職業「サービス」	34.9%	勤務先の業種「宿泊業、飲食サービス業」	18.4%
非正社員3年以上	35.0%	現在の職業「生産工程・建設」	18.7%
非正社員経験のみあり	36.3%	勤務先の業種「わからない」	19.0%
最終学歴「高校」	36.6%	現在の仕事上の立場「パート・アルバイト」	19.0%
正社員経験0年	36.6%	現在の収入「5万円未満」	19.7%
勤務先の業種「宿泊業、飲食サービス業」	36.8%	正社員経験0年	20.1%
卒業直後の就労形態「非正社員・非正職員」	37.6%	非正社員経験のみあり	20.3%
現在の仕事上の立場「パート・アルバイト」	37.8%	勤務先の業種「金融業、保険業」	20.4%

※どの設問についても下位15位までに入る属性に網かけを付した。

学校時代のキャリア教育をよく覚えており、よく学んだ者は、現在、「直線的」で「恵まれた」キャリアを歩んでいると解釈すれば、学校のキャリア教育は将来の若者の職業生活に大きな影響を与える重要な要因であり、それゆえ、学校のキャリア教育の環境をよりいっそう整備し、キャリア教育から多くを学べる若者を増やすべきであるとする示唆が引き出せる。

一方で、本章の結果は、むしろ、無業者、求職者、非正規就労者に対して、より有益に感じられるようなキャリア形成支援を何らかの形で提供する必要性を示唆するものであるとも考えられた。望ましくは、いわゆる「直線的」ではなく「恵まれた」とは言えない期間があったとしても、長期的には主体的にキャリアを形成し充足した職業生活を送るための基礎となるようなキャリア教育が学校段階もしくは学校卒業後のどこかの段階で、で施されるべきであることを示唆した。

(4)「第5章 学校時代のキャリア教育と現在の就労意識との関連」の主な内容

現在の就労意識と学校時代のキャリア教育の評価との関連を検討した結果、キャリア教育は、現在の生活全般に対する満足感、これまでの職業生活に対する満足感、将来の目標の明

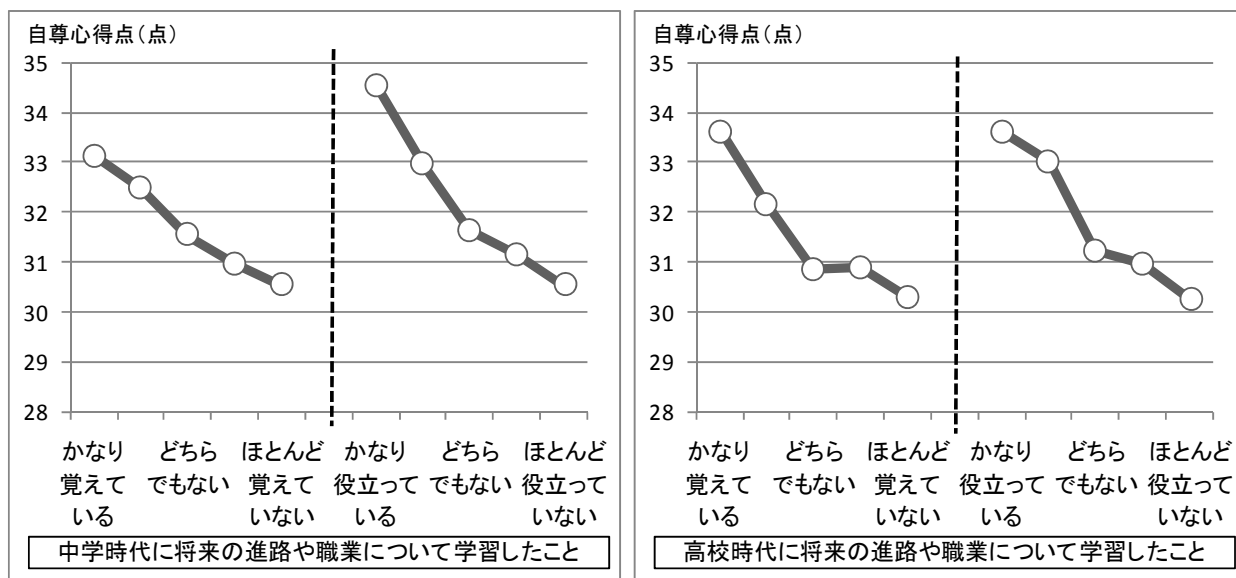
確さ、自尊心などと、総じて密接な関連があることが示された（図表14～図表15参照）。

現在の就労意識と学校時代のキャリア教育に対する評価の関連モデルを検討した結果、①職業生活に対する満足感、将来の目標等の明確さ、生活全般に対する満足感には、高校時代のキャリア教育が「役立っている」という評価が全般的に影響を与えていた。②本人の自尊心も、職業生活に対する満足感、将来の目標等の明確さ、生活全般に対する満足感に全般的な影響を与えていた。③これまでの人生は自分の努力で決まってきたという感覚は、将来の目標の明確さや自尊心に影響を与えていた。④中学時代のキャリア教育を「覚えている」か否かも将来の目標等の明確さに影響を与えていた（図表16参照）。

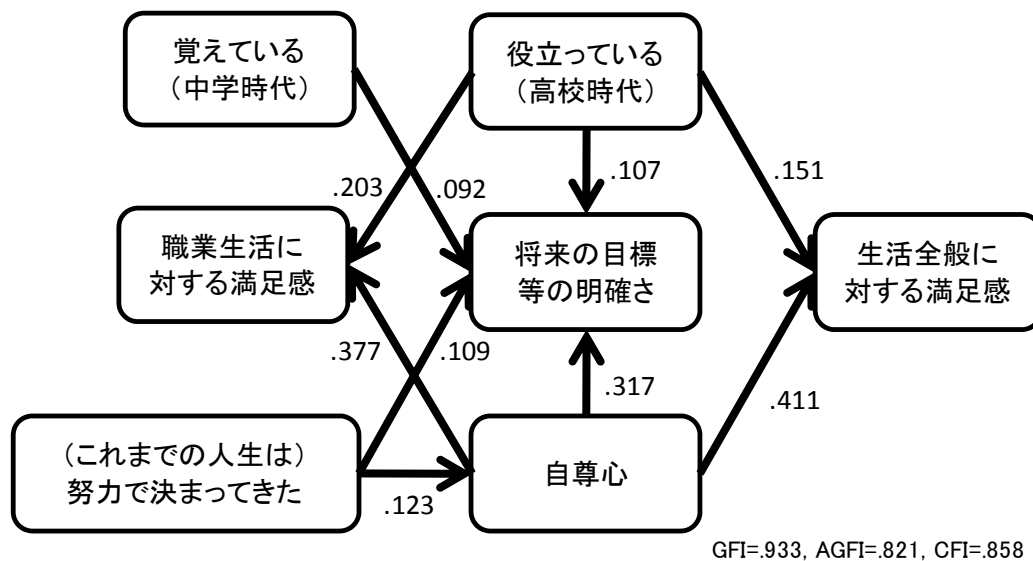
図表14 現在の就労意識と学校時代のキャリア教育の評価の関連

	中学時代		高校時代	
	覚えて いる	役立っ ている	覚えて いる	役立っ ている
現在の生活全般に、どの程度、満足していますか	.120	.172	.147	.200
これまでの職業生活に、どの程度、満足していますか	.157	.215	.187	.251
将来の目標や自分のやりたいことが、どの程度、明確ですか	.175	.157	.192	.193
自尊心(自己評価)得点	.111	.109	.124	.138
(これまでの人生は)本人の能力によって決まってきた	.003	-.036	.014	-.026
(これまでの人生は)本人の努力によって決まってきた	.046	.022	.066	.048
(これまでの人生は)周囲の環境によって決まってきた	-.002	-.060	.007	-.023
(これまでの人生は)運によって決まってきた	-.025	-.068	-.029	-.053

※数値は順位相関係数。1%水準で有意な相関係数を網かけに



図表15 学校時代のキャリア教育の評価別の自尊心得点の平均値



図表16 現在の就労意識と学校時代のキャリア教育に対する評価の関連モデル
(共分散構造分析による推計)

以上の結果から、学校時代のキャリア教育は、基本的に現在の満足感や将来の目標の明確さなどと広く関係していること、自尊心は、現在の満足感や将来の目標の明確さを下支えする重要な要因であることなどが示された。

従来、キャリア教育では、キャリアや就職に関わる事からのみを指導目標とすることが多かった。しかし、本人の根本的な自尊心は若者の就労意識に全般的な影響を与えていることを重視すれば、こうした自尊心をいかなる形でキャリア教育に組み込んでいくのか（組み込まないのか）、また、労働行政の側からはどのような側面的なサポートが可能なのか等について、ある種の萌芽的な議論がなされて良いということを示唆した。

(5)「第6章 学校時代のキャリア教育と学校生活・家庭生活との関連」の主な内容

第6章では、学校生活・家庭生活と学校時代のキャリア教育との関連を検討した。その結果、以下の諸点が示された。第一に、総じて、学校に適応的であったほど、学校時代のキャリア教育に対する評価が高かった。特に、中学・高校時代においては「相談に乗ってくれる先生がいた」ということがキャリア教育の評価と強く関連していた。第二に、一方で、学業成績とはそれほど強い関連はみられなかった。強いて言えば、中学時代の学業成績は下の方だったと回答した若者で、極端に学校時代のキャリア教育の評価が低いという結果が目立った。第三に、就職活動がうまくいった若者、学校を中退しなかった若者、学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っていると感じる若者ほど、学校時代のキャリア教育の評価が高かった。特に、学校時代に学んだ知識とキャリア教育の評価の関連は比較的顕著であり、ここでも、学校時代の知識はほとんど仕事に役だっていないと回答した者で、極端に学校時代のキャリア教育の評価が低いという結果が目立った（図表17～図表19参照）。第四に、家庭生

活が良好であった者ほど、学校時代のキャリア教育の評価が高かった。特に、「学校での出来事などを家族で話し合った」「将来について話し合った」など、家族で将来について話し合ったという若者で、特に学校時代のキャリア教育の評価が高かった（図表20参照）。

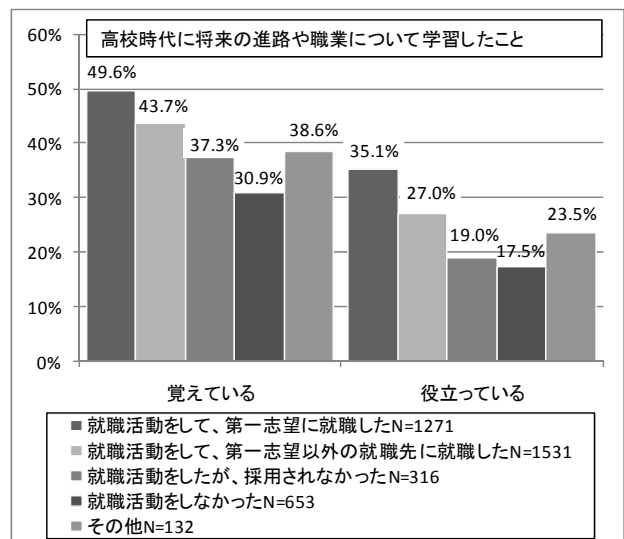
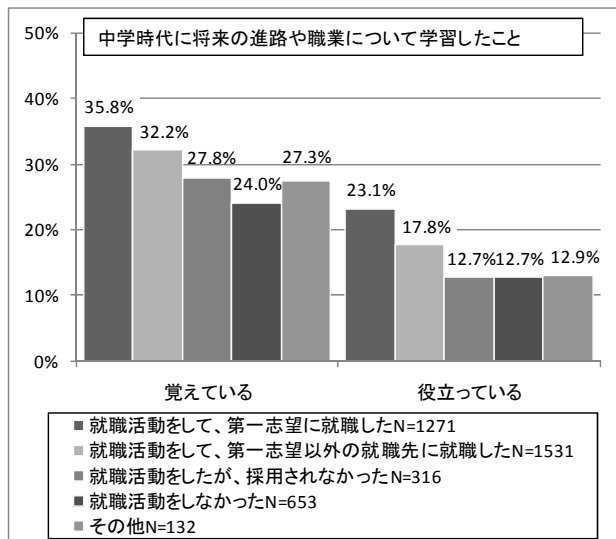
これらの結果に基づいて、労働行政のキャリア教育との関わりの1つの形として、学校時代におけるキャリア教育への一層緊密な連携と、学校のキャリア教育から十分学べなかった者に対して、その分を補填するようなキャリア形成支援を常に用意しておくことの必要性等を示唆した。

図表17 中学時代の学校生活と中学校時代のキャリア教育に対する評価との関連(左)および
高校時代の学校生活と高校時代のキャリア教育に対する評価との関連(右)

中学時代	将来の進路や職業について学習したこと 覚えてい 役立って ますか いますか		高校時代	将来の進路や職業について学習したこと 覚えてい 役立って ますか いますか	
好きな先生がいた	.153	.156	好きな先生がいた	.184	.193
相談に乗ってくれる先生がいた	.188	.233	相談に乗ってくれる先生がいた	.218	.229
学校を休みがちだった	-.017	-.034	学校を休みがちだった	-.102	-.097
家で勉強をよくした	.162	.136	家で勉強をよくした	.210	.169
友人が多かった	.169	.143	友人が多かった	.180	.170
いじめられたことがあった	.012	-.016	いじめられたことがあった	.003	.005
部活動を一生懸命していた	.107	.118	部活動を一生懸命していた	.161	.157
学校は楽しかった	.129	.147	学校は楽しかった	.188	.193

※数値は順位相関係数。1%水準で有意な相関係数を網かけにした。各列で最も値の大きな相関係数を太字にした。

※数値は順位相関係数。1%水準で有意な相関係数を網かけにした。各列で最も値の大きな相関係数を太字にした。



図表18 学校卒業時の就職活動別の学校時代のキャリア教育の評価

図表19 最後に通った学校の中退の有無別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

	大学短大 専門等 卒業 N=3190	大学短大 等中退 N=163	高校卒業 N=514	高校中退 N=19
中学				
職場体験学習やインターンシップ	25.2%	27.6%	32.5%	42.1%
履歴書の書き方や面接試験の練習	10.2%	18.4%	14.8%	21.1%
就職活動の進め方や試験対策の授業	4.0%	4.3%	6.8%	21.1%
コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	5.5%	6.7%	7.2%	26.3%
労働法(働くことに関する法律)に関する授業	3.2%	4.3%	3.9%	31.6%
高校				
職業興味や職業適性などの検査	31.6%	34.4%	46.1%	15.8%
職業や仕事を調べる授業	19.7%	25.8%	33.3%	21.1%
職業人や地域の人に仕事の話聞く授業	14.1%	12.9%	21.8%	5.3%
職場体験学習やインターンシップ	9.3%	15.3%	24.3%	5.3%
進路に関する二者面談や三者面談	81.6%	76.7%	74.9%	31.6%
履歴書の書き方や面接試験の練習	19.9%	26.4%	60.5%	10.5%
就職活動の進め方や試験対策の授業	12.5%	15.3%	42.2%	0.0%
コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	12.2%	12.9%	31.7%	5.3%
労働法(働くことに関する法律)に関する授業	6.3%	11.0%	14.8%	15.8%
大学				
職業興味や職業適性などの検査	53.0%	16.0%		
自分の性格を理解するための検査	51.0%	16.6%		
職業や仕事を調べる授業	25.6%	11.7%		
職業人や地域の人に仕事の話聞く授業	21.9%	9.8%		
職場体験学習やインターンシップ	36.3%	17.2%		
ボランティアなどの体験活動	18.4%	9.2%		
進路に関する二者面談や三者面談	21.3%	4.9%		
進路に関する個別相談やカウンセリング	34.9%	11.0%		
進路の目標や計画を考える授業	22.3%	6.1%		
履歴書の書き方や面接試験の練習	57.9%	12.3%		
就職活動の進め方や試験対策の授業	58.5%	16.6%		
コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	39.1%	12.9%		
労働法(働くことに関する法律)に関する授業	25.5%	9.2%		

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

図表20 家庭生活と学校時代のキャリア教育に対する評価との関連

	中学時代		高校時代	
	覚えて いる	役立つ ている	覚えて いる	役立つ ている
しつけが厳しい方だった	.092	.086	.120	.113
帰宅の門限が厳しかった	.066	.075	.086	.098
家の手伝いをさせられた	.087	.087	.123	.110
学校での出来事などを家族で話し合った	.172	.157	.188	.163
叱られることが多かった	.049	.040	.056	.054
欲しいものは買ってもらえた	.048	.073	.023	.043
親は学校の成績を重視していた	.078	.064	.059	.048
父親は自分の気持ちをわかってくれた	.132	.169	.147	.179
母親は自分の気持ちをわかってくれた	.118	.156	.139	.169
父と母は仲が良かった	.068	.084	.084	.092
家庭の雰囲気が明るかった	.105	.121	.127	.127
将来について話し合った	.220	.251	.264	.274

※スピアマンの順位相関係数。相関係数.043以上は1%水準で有意。 .15以上の相関係数に網かけを付した。

(6)「第7章 学校時代のキャリア教育の自由記述データによる分析」の主な内容

第7章では、小学校や中学校、高校、大学等の学校時代において、現在の職業生活に関係があったと思うことの自由記述データを用いて分析を行った（図表21～図表24参照）。

その結果、第一に、自由記述の内容の時代的変遷の分析を通して、職業生活に関係する各時代における基本的な事柄を見出した。具体的には、①関与する他者（【友達】【先輩】など）や活動（【クラブ】【部活】【アルバイト】【サークル】など）の幅の広がり、②同一の語句の意味内容の変遷などが示された。第二に、職業生活を営む現在から学校時代の経験を想起した際に、授業としての「キャリア教育」も一定の記述があるものの、人間生活を営む上での基礎的なルールの学習である【活動】と職業生活に結びつく社会的なルールの教育的効果を有している【アルバイト】といった《キャリア教育》がより「現在の職業生活に関係した出来事」として結びつく傾向にあることを明示した。第三に、「現在の職業にもっとも関係した時代」について、①学歴を問わずに約70%の人が「最終学歴」を選択する一方で、②「現在の身分」によっては、「最終学歴」を選択する割合が低下するという事実から、「就職」という経験は、その結果によっては過去の意味づけを変容させる人生の転機となっているという記憶の現在性・社会性との関連を明らかにした。

以上の知見から「キャリア教育」の課題として、①「キャリア教育」が「社会」の変化に対応していかなければならないという点、②学校時代のキャリア教育は授業としての「キャリア教育」のみで成り立つわけではなく、学生の自主的な行動からも成り立っていた点、③学校教育における「キャリア教育」の効果を測定することの困難という問題を示唆した。

図表21 現在の職業生活に関係のあったと思うことの自由記述で出現頻度の高かった語句

(小学生の頃)

友達	424	社会	126	クラス	71	担任	57
勉強	300	興味	107	集団	70	手伝い	56
学校	267	見学	106	遊び	70	ピアノ	56
授業	261	コミュニケーション	99	野球	68	職場	54
仕事	245	小学校	86	基礎	68	ゲーム	52
友人	243	受験	85	学習	67	計算	52
先生	236	中学	83	地域	66	機会	51
自分	208	転校	78	家庭	65	家族	48
生活	171	クラブ	76	話	62	人間	47
関係	160	委員	76	ボランティア	61	行動	47
職業	152	両親	73	父親	61	運動	45
習い事	145	サッカー	72	経験	59		
活動	144	スポーツ	72	体験	58		

図表22 現在の職業生活に関係のあったと思うことの自由記述で出現頻度の高かった語句

(中学生の頃)

活動	624	仕事	207	先輩	87	教師	62
部活	570	職場	175	成績	87	話	60
勉強	540	ボランティア	147	進路	86	老人	59
体験	318	受験	146	クラス	84	委員	59
学校	303	生活	131	進学	82	行動	58
関係	302	上下	126	年間	69	後輩	54
授業	275	生徒	118	社会	66	ホーム	50
自分	267	中学	111	コミュニケーション	65	地域	46
先生	248	学習	108	経験	65	忍耐	43
高校	232	英語	94	練習	65	野球	42
職業	229	クラブ	91	努力	64	所属	40
友達	226	人間	90	パソコン	63		
友人	215	興味	88	テスト	63		

図表23 現在の職業生活に関係のあったと思うことの自由記述で出現頻度の高かった語句

(高校生の頃)

勉強	706	関係	228	興味	104	相談	68
アルバイト	705	進学	224	資格	102	進学校	66
大学	446	先生	213	クラス	99	コミュニケーション	60
活動	416	進路	191	パソコン	97	努力	58
学校	372	職業	169	理系	96	クラブ	55
部活	355	社会	151	人間	92	文化	55
授業	350	お金	143	年間	87	上下	55
自分	343	生活	131	体験	85	話	55
友人	281	就職	130	成績	84	参加	54
受験	264	ボランティア	128	英語	82	目標	53
友達	242	接客	126	専門	79	数学	53
高校	237	バイト	118	生徒	70		
仕事	234	経験	107	選択	69		

図表24 現在の職業生活に関係のあったと思うことの自由記述で出現頻度の高かった語句

(大学生等の頃)

アルバイト	1257	接客	211	友達	117	卒業	76
活動	488	社会	206	会社	111	試験	74
勉強	418	関係	205	インターンシップ	106	海外	73
就職	394	実習	182	興味	105	教育	73
自分	388	バイト	176	コミュニケーション	98	話	69
仕事	370	研究	167	企業	88	参加	69
大学	348	ボランティア	162	人間	87	部活	68
授業	340	資格	160	留学	82	年間	65
専門	293	知識	156	ゼミ	81	旅行	61
学校	266	生活	153	取得	79	分野	60
友人	247	職業	143	先生	78	仲間	54
サークル	239	お金	131	体験	78		
経験	221	マナー	120	パソコン	76		

(7)「第8章 労働行政におけるキャリア教育の推進に向けて」の主な内容

第8章では、各章の分析結果から、今後のキャリア教育推進に向けて注目される事項を要約し、労働行政におけるキャリア教育推進施策等について若干の示唆を行った。

キャリア教育の有効性を検討する指標の1つとして、職業生活を送っている現在におけるキャリア教育の記憶に注目し、キャリア教育を記憶していることに影響を与える「職業興味や職業適性などの検査」、「職業や仕事を調べる授業」、「職業人や地域の人に話を聞く授業」、「進路の目標や計画を考える授業」、「ボランティアなどの体験活動」、「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」等の自己理解、仕事理解、啓発的経験、意思決定に係る各学習の重要性を確認した上で、これらを後に役立ったと評価されるように実施することが課題であるとの指摘を行った。また、最終学歴に近い学校種に通っているときに将来の進路や職業について最も学習したとする傾向も強かったことから、最終学歴直近の学校段階におけるキャリア教育について、総仕上げとしての意義を指摘した。

さらに、学校卒業時の就職活動に成功し直線的なキャリアを歩んだ者ほどキャリア教育の記憶があり役立っているとの評価が高かった一方で、転職、非正規就労経験者等直線的なキャリアを歩まなかった者においても、キャリア教育を高く評価する者では一定の収入を得られていたことから、労働市場で困難局面に遭遇してもキャリアを形成する基礎力を育み培うキャリア教育に対する期待を記述した。

加えて、職業生活や生活全般、将来の目標設定に対するキャリア教育の正の影響と、自尊心が職業生活や生活全般、将来の目標設定に与える正の影響及び自尊心に正の影響を及ぼす「(これまでの人生は)努力で決まってきた」という考え方に着目し、キャリア教育による新たな体験や刺激が、学校生活を積極的に送る方向や努力が人生に影響を与えると考える方向へと機能する可能性を示唆した。キャリア教育が学校生活を積極的に送り、努力することを促すような内容となるように留意することにより、キャリア教育と学校生活の教科等との好循環が形成できると考えられた。

キャリア教育は、このように学校生活への好循環と職業生活への好影響の可能性を内在している。これを現実のものとするためには、教育行政と関係行政が緊密に連携し、学校外の資源を有効に活用して、多角的な教育支援を行うことが必要である。

労働行政においては、職業適性検査等の効果的な提供（自己理解支援）を行うほか、学生・生徒が職業を身近なものとして興味を持つことができるよう、地域の実情に即した職業情報の収集と提供や職業人の講話（仕事理解支援）、職場体験（啓発的体験支援）等の実施を工夫すること、教育機関領域におけるキャリア・コンサルティングの充実（意思決定支援）とそのためのキャリア・コンサルティング能力の向上支援を行うこと、就職活動を効果的に推進するため大学等に対する就職活動の進め方や履歴書作成等に関するノウハウを提供すること等、職業や労働に最も近いという特徴を活かして、キャリア教育へ一層貢献することが重要であるとの指摘を行った。

労働政策研究報告書 No.125 サマリー
学校時代のキャリア教育と若者の職業生活

発行年月日 2010年 11月 19日
編集・発行 独立行政法人 労働政策研究・研修機構
〒177-8502 東京都練馬区上石神井4-8-23
(照会先) 研究調整部研究調整課 TEL:03-5991-5104
(販売) 研究調整部成果普及課 TEL:03-5903-6263
FAX:03-5903-6115

印刷・製本 有限会社 太平印刷

©2010 JILPT

* 労働政策研究報告書全文はホームページで提供しております。(URL:<http://www.jil.go.jp/>)